

# 幼児教育における造形表現としての折り紙研究

児童学研究科 児童学専攻 05-0635 山谷佳子

## 1. 研究の目的

周知の通り、「折り紙」は、紙を折って形成するものであり、現在でも趣味的活動として幼児から成人、老人に至るまで親しまれている。『童遊文化史第1巻』（半澤，1980）によると、「折り紙」遊びは古くからの伝承とされている。すなわち、江戸時代中期に庶民の間に普及し、明治期以降、冬の遊びとして、さらには民間伝承の季節行事などに関連した遊びとして、発展してきた経緯がある。

紙を「折る」ことは、古来より遊びとして用いられる一方で、多様な方法で利用されている。祭祀儀礼における祓いの具や、平安時代の貴族が書状を別の紙でつつむなどの実用折り紙、後の武家社会では、贈答品の包みや婚礼などにおける儀礼の席の飾りなどの礼法折り紙等、時代の流れに伴って形と利用方法を変えている。時代によっては一般庶民の手が届かない品として貴族などの特権階級の人々によって用いられてきた。

現在、紙は身近にありふれたものとして誰もが生活の中で使用している。その中で、取り分け、紙を折って立体的に強化して用いることが普遍的に行われている。それは、箱などの実用的なものを作る手段として使われたり、病気見舞いなどに「鶴」を折り回復への願いを込めることや、一日一羽づつ折り、それを千日想い続けた証として平和への願いを象徴する「千羽鶴」として用いられるなど、習俗的にも広範囲に生活の中で生かされている。

趣味としてだけでなく、学校教育においても「折り紙」は、フレーベルの「恩物」が取り入れられた際に、一定の成果を得ようと努力するものであると考えられた「手技」の一つとして明治9年東京女子師範学校附属幼稚園において導入されている。これは、「折り紙」を趣味以上のものと考えて教育の中に取り込んだものである。

現在、「折り紙」は、幼稚園教育の中で日常的に行われている活動である。本研究では、筆者は「折り紙」を基盤にした「折り紙造形」についての提案を行い実践的にそのカリキュラム化(教育計画化)を図り、幼児の実験的な活動を通して、その有効性を実証することを目的としている。

「折り紙」の教育目標としては、知性や感性を豊かにする手段としての役割を果たすために①紙に親しむ②手の巧緻性を養う③色や形、手触りを楽しむことなどがある。

さらに、「折り紙」の教育活動の特性としては、①手渡し教育（互いに教えあえる教育）・温かみのある教育ができること②結果はもとよりのこと、製作過程において想像力・創造力が養えること③生活と結び付けやすいこと④諸感覚と結び付けて、歌う、踊る、遊ぶなどの活動がしやすいこと⑤入り口がやさしく誰にでも親しめる上に奥行きが深いこと⑥日本の伝統的な文化としての価値が高いこと⑦教材として安価で安全なことなどを挙げた。

このように教育的な要素を持つ「折り紙」と「折り紙造形」は、好きな子どもが好きなときにやればよいという趣味的(選択的)な活動ではなく、全ての子どもが幼稚園教育要領に沿って計画的に学ぶ価値のあるものと筆者は考え、そのことが本論文作成の動機となった。

本研究では、特に幼稚園の教育活動に焦点をあて「折り紙」と「折り紙造形」との関連を明確にし、新たな方策について実践的な提案を行うことを目的としている。

## 2. 研究の方法

本論文は、折り紙の文献研究に基づいた実践研究を主体としている。実践に当たっては、茨城県下の住宅街にある私立 M 幼稚園（総園児数 123 名）を実践園とし、約 1 年間に渡り 5 歳児と活動を共にした研究成果を分析・考察し、カリキュラム化を図る方法をとった。

## 3. 論文の概要

本論文では、序論において研究の目的及び動機と内容を明らかにした。紙の歴史に伴って、紙を折るということは宗教や儀式、その他、人々の生活の中で生かされてきた。それが「折り紙」という形で親から子へ子どもから次世代へと日々の生活の中で伝承されて行くようになっていく経緯についても必要上若干触れた。その理由は、伝承されて行く中で恣意的（無意図的）に生じていた教育的意義への関心（すなわち血の通った温かみのある教育への関心、あるいは創作的・創造的な折り紙への展開に対する関心）を喚起したいと思ったからである。

幼稚園における「折り紙」の活動が継続的、発展的に小学校教育の中でも生かされ、幼児の感性や知性の発達に寄与できるものとなるためには、「折り紙」を手技的なものにとどめず、幼児の創造力を引き出す手段として活用する積極的な姿勢が必要である。

本論の 1 において、まず「折り紙」の特徴を理解するために、歴史を振り返り「折り紙」がどのように伝承されてきたか、また、教育の中に取り入れられてきたかを明らかにした。その中では、フレーベルの意図する教育的側面と、日本における幼児教育の狭間で、幼児にとってなじみの強い事物を立体的に具現化する指導方法が行われていたことが判った。そのことによって、教師から幼児へ一つのを同じように折るという教え、教わる形式で行われた指導法は、模倣性の強さを指摘され、義務教育の中から次第に姿を消して行った点について述べた。

これは、次に問題とする「折り紙造形」の考え方の序奏部分とも言うべき論述となっている。

本論の2では、本論文にて主張する「折り紙造形」が、幼児の想像性や創造性を育み、問題解決能力を培う基となるものであることについて述べた。「折り紙」は、趣味的にも教育的にも意義のある材料である。造形教育の特徴を活かして「折り紙」を「折り紙造形」とすることで「折り紙」の教育的意義は増大する。この章では、その目的と内容、方法は従来の「折り紙」の精神を基礎基本としながら「折り紙」に大きな付加的価値を与えるものであることについても説明してある。

本論の3は、本論文の要ともなる部分である。ここでは、具体的に「折り紙造形」の目的や内容、方法を明らかにするために、実践に基づいて実例をあげてまとめている。幼児は、伝承折り紙の形を基礎基本に沿って楽しんで作りながらも、その形にこだわることなく様々な紙によって変形させ、遊び方を工夫している。この活動を通して幼児は、色や形、材質の変化による刺激を受けて意欲を喚起させ、活発な取り組みを見せたことを紹介した。

#### 4. まとめ

本研究の中心課題は、序論でも述べたように「折り紙」を造形教育的視点から捉え、カリキュラム化して行こうとするものである。「折り紙」と「折り紙造形」においては、発達に即した望ましい学習が行われることに留意することを促している。

「折り紙造形」における「造形→問題の発見→解決への想像→創造による解決→新たな造形」という作業の繰り返しの中で、自ら課題を見つけ、自ら解決方法を模索する問題解決能力を育むことができる。労働過程とも似ているこの繰り返しを行うことは、人間にとって生きるために必要な力でもある。

本論文では、「折り紙造形」の2通りの指導方法を提起してある（本文 24 頁）。それはすなわち従来の「折り紙」が教師主導型であったのに加えて、子ども自身が折り方を考え工夫し、完成型を導き出して行く子ども主体型の方法である。そこでは、子どもは、教師が示範する完成品を分解して折り方を発見し問題解決を行っている。

幼児が実際に行ったように、「折り紙造形」の中で感じた疑問や欲求をどのように乗り越えていくのが大切なことであり、そこに発達に応じた課題を持たせることで学習が成立する。好きなときに好きなように作る恣意的活動だけでなく、全ての子どもの心身の発達をうながし、知的、感性的能力を培う意味からも計画的に活動に取り入れていく姿勢が必要である。この「折り紙造形」をカリキュラムの中に取り入れることは、「折り紙」文化の伝承に寄与するだけでなく、造形教育的にも重要な意義を持つ「折り紙造形」として発展的に教育の中に位置づけるこ

とつながる。

## 5. 今後の課題

今後の課題は、この「折り紙造形」を継続的、発展的にカリキュラムの中にあてはめ、各々の子どもの育ちと照らし合わせて計画することにある。それは、幼児教育において、保育者の立案する保育計画の中に「折り紙造形」を易しいものから難しいものへ発達過程に応じて発展させて組み込んでいくことでもある。フレーベルは、恩物を考えるにあたり、どんな遊具であろうが、

「(前略) それは決して複雑なものや完成された既製品ではなく、むしろ単純な基本的な形であって、しかもその単純なうちにも多様なものを含んでおり、基本的なものの中に創造していくのになくはならない要素としての論理的な、数理的な契機を含んでいる形でなければならない。このような遊具であると、幼児はそこからあらゆるものを作り出すことができる。(後略)」(荘司, 1929, p.193)

としている。

本研究では保育者の「折り紙」に対する意識改革を図るような問題を提起した。そして「折り紙造形」という新たな視点を加えることで子どもの想像的、創造的思考の育ちを保障することをうながしている。本論における実践研究を通して多くの保育者が「折り紙造形」のもつ新たな教育的な意義を広く認識し、全ての幼児の教育に計画的に取り入れていく手がかりとすることを筆者は望むものである。